

浄土

正月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別扱承認雑誌第三五二号)
昭和四十三年十二月二十五日 印刷 昭和四十四年一月一日 発行

第三十五卷 第一号



目 次

表紙「松 の 芽」松濤達文画

御題「星」	岸 信 宏 (2)
座右の銘② 校庭の一隅から	吉 川 哲 雄 (6)
座談会 現代人の信仰①	(8)
十二因縁① 光を求めて (無明)	渋谷 賢 応 (12)
ハガキでひとこと ①	(15)
とり (酉) の年	安 井 翠 (16)
教育と宗教①	渡 辺 真 澄・福 井 豊 信 (18)
合掌する心	波 山 光 男 (22)
現代生活と宗教④ 葬式有用論	藤 井 正 雄 (24)
ひとくち伝記① 暗黒のなかのメス	高 橋 良 和 (27)
後 記	(32)

今月のことは



早咲きの玉ボタンが美しく咲きそって
いる。あたたかい伊豆方面では、もう梅の開花
がつたえられ、ちらほら梅だよりも聞かれ
る。

時間の連続からいうなれば、格別の変化が
あるわけではないが、やはり新春を迎える心
地は、すがすがしさとともに、身のひきしま
る思いがする。

昨日もいたずらにくれぬ。今日もまたむ
なしくあけぬ。いまいくたびかくらし、い
くたびかあかさんとする。

新年を迎えることに、めぐる年月の早きこ
とをおもひ、毎日の生活を静かに内省したと
き、まことに忸怩（じくじ）たるものがあり
ます。

あるいは金谷の花をもてあそび遅々たる
春の日を空しく暮らし、あるいは南楼に月
をあざけりて、漫々噪る秋の夜をいたずら
にあかす。

現代のわたしたちは、喧噪（けんそう）と
目まぐるしい利根的な生き方のなかで、自ず

からの主体性を見失い、ややもすると埋没し
つつある。過去を反省し、将来にはつきりと
した目的をもち、現実の生活を確固たる信念
のもとに勇気をもって、精いっぱい生きるこ
とのできる現代人はまことに少ない。

ショウベンハウエルの「人生は不平と退屈
との間を往来している時計の振子のようなも
のだ」という言葉は、現代に生きるわたした
ちにも、びったり当てはまることである。

思いながらも、意志がぐくだけてしまう。傷
つけまいとしながら、人を傷つけてしまう。
いらいらしながら、なんとはなしに生きてい
る。

このわたしが、日々の生活のなかに、不安
から解放され、心動ずることなく、充ちたり
た今日を過すことのできる道は、信仰生活よ
りほかにはない。

人生という旅路において、今日という日を
再びたずねることはない。今日を大切に、生
きたいものである。



御題 星

浄土宗門主 岸 信 宏

あかつきの星をながめてみさとりを

開きたまひし釈迦牟尼世尊

いにしへの人は星をも神とみて

あがめまつれる心たうとし

己酉宸題星謹賦

勤苦六年唯座禪

菩提樹下断諸縁

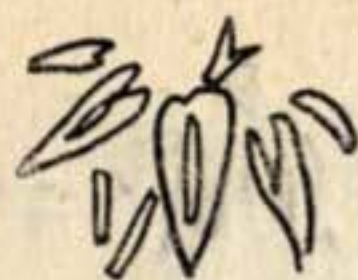
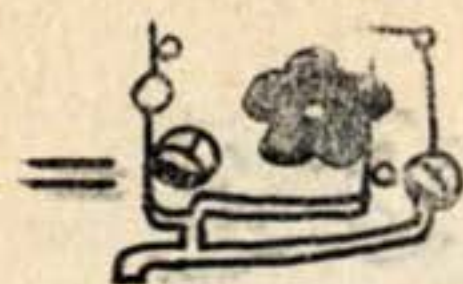
東天瞥見明星燦

大悟豁然心地円



本年正月の御歌会の御題は星と仰せ出されています。科学的文化の進んだ現代の天文学に於て、星とはこういうものであると説明してくれましても、夜空に仰ぐ無数の星のきらめきを、美しいと感じない人はおそらくないでしょう。昔の人は日を見ても、月を見ても、星を見ても、そこに神を見たのであります。太陽崇拜は宗教信仰の始まりともいうことができましよう。私共は太陽の光と熱とがなければ一日も生きることができないのであります。太陽を中心とした月も星もそれは太陽の光を反射したものであると天文学で教えてくれましても、私共の情感では月も星も輝いて見えるのであります。情感の中におのずから感謝と崇拜との念が生れてきます。天地宇宙を本尊としてまつる曼荼羅（まんだら）に於ては日も月も日天子、月天子、或は日光菩薩、月光菩薩として、それぞれの地位に配当して、信仰の対象となつているのであります。星もまた月と同じように感じとられ、無数の星は人々の運命をも支配すると考えられて、星占らない、星まつり等という宗教的行事ともなつているのであります。この素朴的な情感はややもすれば迷信として退けられるのであります。万物を拜む東洋的思想の宗教的情感の中には私は尊いもののあることを見のがしてはならぬと思うのであります。

星というと仏教徒の私共にとって尊いものとして思い出されるのは臘月（十二月）八日の伽耶の東天に輝いた暁の明星であります。悉達（しった）太子の瞿曇（こうたま）比丘は二十九才で北印度の迦毘羅（かびら）城を出で、中印度の前正覺山で、当時の風習に従つて、五人の比丘と共に、六ヶ年間苦行を勤修したのであります。しかし肉体を苦しめるだけの苦行の中には真の解脱の道のないことを知られた瞿曇比丘は、五人の比丘とも別れ、



尼連禪（にれんぜん）河に沐浴して身を清め、牛飼娘の捧げる牛乳によりて元気を回復し、河の北岸の畢波羅（ピツパラ）樹のもとに、葦（あし）草を敷いて座し、我れ若し生老病死の苦悩に充ちたこの人生を精神的に解脱する道を見出すことができなければこの座を起たないであろうという堅い決心をもって結跏趺座（けっかふざ）せられたのであります。終に八日目の暁、東の空に明星が燦然（さんぜん）として輝くのを見て、豁然（かつぜん）として大悟せられたのであります。これを成道（じようどう）と申しています。それから瞿曇比丘のことを釈迦族の聖人という意味で釈迦牟尼世尊と呼び、略して釈尊というようになったのであります。

成道の内容は無明（むみよう）に始まって老死に終る人生愛欲の行路を十二の段階に分ち、これを順観し、逆観すること回を重ね、遂に無明を断ずることが人生の苦悩を解脱する所以であることを悟られたのであります。これを十二因縁と申し、根本の無明を断ずる方法として説かれたのが、四諦（たい）八正道の教とせられているのであります。この十二因縁、四諦、八正道の根本教説から、やがて八万四千といわれる法門が流れでてきたのであります。お念仏の教も勿論その中から一つの精華として現われてきたのであります。

瞿曇比丘が成道せられた伽耶の地を後には仏陀伽耶と申し、畢波羅樹を菩提樹と称し、敷いて座せられた葦の草をば吉祥草（きちじようそう）と呼ぶようになり、その座をば金剛宝座となえるようになったのであります。私は昭和四十一年の二月二十六日にカルカッタから急行列車で夜おそくこの仏陀伽耶に達し、国営のハウス（小宿舎）にとまりました。翌朝、早く起きて庭の芝生に出ますと、すぐ近くに根本大塔のそびえ立つのを見たのであります。私は驚きと喜びとで胸が一杯になり、しばし合掌念仏して、大塔を仰ぎ眺め



たのであります。その時の感激は釈尊が暁の明星を眺めて大悟せられた時の喜びに一脉相通するものがあるといつては不遜（ふそん）にはなるでしょうか。

この根本大塔は西紀前三世紀時代に出世の阿育（あしよか）大王によって建立せられ、西紀後四、五世紀頃には現在の大塔の形となったのであります。その周囲には大菩薩寺、大覚寺と称せられる寺院や、僧房が建てられ、学者や巡礼者が雲集したのであります。今はその面影をしのぶこともできませぬが、東洋の仏教國の諸國は、大塔の周辺にそれぞれ國の寺院を建立して自國の巡礼者の便宜を計っているのであります。今回我が國にでも國際仏教興隆協會によって印度日本寺建設の議が熟し、ビハール州より土地の提供を受け、先ず宝篋印塔が建立せられ、その落成慶讃の法会を修するために、私は全日本仏教会長の職にありましたので、その導師をつとめるために、一行五十名程と共に渡印して、その法要を無事つとめることができましたのであります。

印度日本寺はこの宝篋印塔に隣接して起てられる予定でしたが、ビハール州はここに都市計画をたて、一大総合大学を建設する予定がありますので、日本寺は宝篋印塔の建てられた土地とは少し離れたところ、タイ國の寺院に隣接して建てられることとなり、この春（四十三年）起工式を終り、この十二月八日（四十三年）釈尊成道の日を期してその上棟式を挙げることとなりましたのであります。外觀、内容共に各國の寺院におとらない日本寺の建設を、この仏陀伽耶の聖地、根本大塔の周辺に見ることのできますことは我等日本仏教徒の大いなる喜びであります。先に建立せられた宝篋印塔は都市計画による十字路の一角を占めることになることです。大きな御影石で造られたこの宝篋印塔は小高い円墳の上に永く日本仏教徒の釈尊に対する敬仰の象徴として世界の人々によって眺められることでしょう。

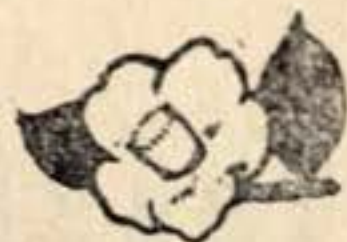
座右の銘

第 2 回

校庭の一隅から

大本山光明寺執事長

吉 川 哲 雄



天の時は地の利にしかず。地の利は人の和にしかず。

日々好日処在道場。

とかく世の中が自己中心の考え方に傾き、暖みがある思いやりの心がだんだん失われつつあることは寂しいことであります。親子・夫婦・師弟の間に於て又経営者と従業員の間に於ていろいろの問題がকাশし出されて居ります。特に最近の大学問題はこうしたことでありましようかまことに暗然たる思いがいたします。世の中の間人関係がうまく調和のとれた時建設があり進展があります。聖徳太子が国家統一の拠り所を仏教の和の精神に求められたことによつて初めて日本が国家の形態を整えたと云われて居ります。和とは安易な妥協でもなければ、その場かぎりの譲り合いでもありません。お互が一人の人間として自分を考えると同時に相手の立場をも考える所から出発いたします。相手の気持になることが大切であります。こう云った点から私の頭の中に残っている一事實を書いて見たいと思

います。

今から十何年か前になりますが私が横浜郊外のある中学校に職を奉じていた時のことであります。当時の教育課程の職業科の中に選択教科というのがありました。これは将来の職をと考えて自己の適性に応じて商業とか工業とか農業とかを選んで学習する課目であります。今でこそ各中学校に於て九〇パーセント以上の生徒が高校に進学しますがその当時は卒業後直ちに農業に従事したり、工場に就職する生徒も相当数ありました。その当時のことですが農業科を選択した男子生徒が三十人ばかり、家庭科を選択した女子生徒がほぼ同数居りました。これらの生徒は中学卒業後直ちに家の農耕作業をしなければならぬ立場でした。彼等は一般の教科の成績はあまり芳しくなく進学して行く他の同僚たちからはとかく白眼視されて居りましたし、又自分自身ある程度の劣等感をもつて居りました。尚困ったことに同じ運命的な境遇にありながらこの農業科組と家庭科組がことに反目していたことであります。当時私は学校の責任

ある立場に立って居りましたが市の教育委員会から道徳教育の研究指定を受けて居りました。人間啓成の上に道徳は基本的なものであり、という立場に立って研究を進めて行った結果道徳以前のものであり、人間的心情を清めることが必要であるという結論に達し、道徳教育から情操教育研究へと発展して行きました。音楽の上から美術の上から宗教の上から情操をいかに陶冶したらよいかという点を追求してゆき具体的な一方法として環境整備ということをとりあげました。そして全校一致して校舎、校庭の美化に努力しようというのを申し合せそれに向って精進したわけであり、ります。ところが生徒と職員の間、に於て、又生徒と女生徒との間に於て中々しっくりした人間関係が得られず日夜苦心して居りました。特に先に述べました農業科と家庭科生徒の間のしこりが根強いものでありました。学校自体がそういった状態に置かれたある暑中休暇中の一日でした。炎天の中を農業科の生徒が担任の教師の指導の下に校庭から上の校舎に上るための階段のコンクリート打ち作業

をして居りました。それは十日間も続く作業でした。特にその日は温度計がその年の最高を示した酷暑の日でありました。男子生徒は素肌となり流れる汗を拭う暇もなく黙々とこの重労働を続けて居りました。この光景を校舎の二階の窓から見おろしていた二、三人の女生徒がありました。それが家庭科の生徒だったので。初めのうちは他人ごととして冷やかな態度でその作業を見つめて居りましたが時間がたつにつれて彼女たちの態度に変化を及ぼして来ました。真剣な男子生徒の作業が女生徒の胸を射たのでありましょう。「大変だわ」「ご苦労さまだわ」という同情と尊敬のまなざしに変化して行きました。そしてその翌日彼女たちの呼びかけによって家庭科の生徒が全員登校し、米やら玉葱やら馬鈴薯やらを各自が持ちよって男子生徒へのライスカレーの接待となりました。そしてその作業が完成するまでこの善意の調理が継続されました。一つの誠実な行為が人の心を動かす、その心が次の善行を生みました。いづれが因いづれが果であるかわかりませんがその

日から男女生徒間の精神的なつながりがとれるようになりました。農業実習地で栽培された花が家庭科教室の花瓶にいつの間にか、されるようになりました。やがてこの行為が全校生徒の団結へと発展し校舎の内外共に目を見張るようなみごとな環境整備の結果を現わしました。

以上のことはまことにさ細なことであり、す。然し相手の立場に立って考えることが和の精神を招来し、それが時・所を越えて大願成就となったのであります。私たちが何か一つのことに成功したとき、チャンスに恵まれたとか、場所がよかったとかと考え勝ですが根本に於て人間の和合団結の力によるものであることに思いを寄せなければなりません。と同時に一刻一刻に又その場所その場所に教育が行われるものであることは宗祖の平生念仏に通ずるものであることを痛感した次第であります。

《座談会》 現代人の信仰 《その一》



出席者

寺内大吉
(作家)

中島真哉
(梅窓院副住職)

松川文豪
(聖橋高校々長)

真野竜海
(大正大学助教授)

松濤達文
(画家)

安居香山
(大正大学助教授)

実践する信仰への導き

安居 本日はお急しい中お集りいただきありがとうございます。早速ですが、現代人、特に若人の信仰を中心に話しをすすめたいと思います。今日若人は信仰をどのようにとらえているでしょうか。

の本堂を借りに来て、坐禅をしておりますが、大衆的な実践行という上では坐禅が一番ではないでしょうか。

安居 私は過日、世田谷九品仏で大正大学の一般女子学生を対象として、二泊三日の修養会をもったのですが、その中で坐禅を取り入れました。それがいろいろな話しを聞くよりも何か修行したという気持になったようです。また、浄土宗学生の二年生を対象に夏に知恩院で実践仏教を行なうのですが、そこで念仏を唱えさせながら、背骨をのばさせ正座させたのですが、それが一番印象に残ったといっていました。ですから、こうした厳しいものが何かアピールするのですね。

寺内 ですから、その理論的基本的なものがかたまれば、それを採用できる訳ですね。

真野 ただ座れというのではなく、浄土宗としてはどういう意味があるのかということをも明白にすればよいのですが。

寺内 ともかく禅といったら、今やヨーロッパやアメリカでは流行の最先端ですからね。アメリカではプレイボーイの資格として、禅の本を持つか否かによって決まるといふくらい

最近では禅ブームですがこの点いかがでしょう。寺内 坐禅というのは非常に世界的にアピールしますね。何も禅宗だけのものでなく、セクシヨナリズムなものですから、実践行としては大変結構なものです。特に若人にアピールするところがありますね。私の近くに国士館大学がありますが、ここの学生がよく当方

です。

安居 その禅というのは坐するということですか。

寺内 そうです。あまり坐りはしないのですが、禅の本を読み、禅の境地という、一種のロジックが彼等にピッタリとするところがあるのではないでしょうか。

安居 それは具体的にいうと、どういうことでしょうか。無念無想のようなものですか。

寺内 それは神様がいらっしゃるというキリスト教的ながっかりとしたものではなく、もっと空虚な開放的なもの、こうした考えが若人にアピールしているようですね。

真野 自分から出発していくということですね。

寺内 神というものに押えられずに、自分が中心になして出発するという考えですね。この意味から日本仏教全般として、今はチャンスの時なのです。

安居 自分からということとは、自力と考えてよろしいのですか。

寺内 そう考えて良いと思います。人間中心的な考えが仏教の根本でありますから。

真野 彼等には顯正ということなどは大変な魅力となつていてしょうね。自分の中に仏を発見するというような。

念仏の現代的理解

安居 念仏も伝統宗乗からすると、いろいろ説明があるでしょうが、私達は私達なりに自分のために念仏を申しているのです。それを形にあらわすことが大切ではないでしょうかね。

寺内 この形にあわすということが大切でありながら、なされていないのが現状です。

安居 そういう意味から、少々異端邪説になったとしてもいいですから、今日は大いに語ってもらいたいですね。

寺内 古い宗乗学者から見れば、そうかも知れませんが、異端邪説ではないでしょうね。

安居 異端邪説といわれても、現在においてそれを黙視していてもしかたないでしょう。

真野 しかし、我々も浄土宗人であることは間違いないのですし、それで生きてきている訳ですから、この問題は真剣に考えるべきでしょう。

念仏の若人への呼びかけ

寺内 その例になるかどうかは解りませんが私は三年前に長男を亡し、今は高等二年と中学一年の女の子供が残っています。その当初は女房も悲歎のどん底に落ち、娘達も精神的にスポイルされ、今後どうすれば良いかという訳で、初七日の日より每晚私の留守中も、今日までおつとめをしております。最近では娘達も阿弥陀経を暗誦するまで意欲的になつてきております。ですからただ念仏を申せという前に、坐禅なり、読経なり実践的なことより親しませ、何等抵抗なしにお念仏を唱えることができるようにしむけなければいけないのではないでしょうね。

安居 前の実践仏教でのことですが、ある学生が悪いことをしたので罰則として念仏を課しました。その念仏も浄土宗でいう極楽往生を願う意味のものではなく、罪を懺悔するというような意味合いで、姿勢から厳しくし、一種の坐禅的要素を加えた念仏だったのですが、かえってこれが正座させられて申した念仏として、その意義なりを組み取ったらしい

のです。ですから念仏も何か実践行に転化させられるものとして考える必要があると考えました。

真野 私も若い頃、お別時で念仏をよくやらせられましたが、念仏だけではすぐにあきてしまう。間に礼讃などが入ると何かたのしみながらお念仏できた記憶がありますが、何か変化をもたせる必要があるのではないでしようか。

安居 変化がないならば、念仏を申す意義を若人に与えてやらなければいけませんね。

真野 禅でもただ坐れというのでは、何ら意味合いを持たないものとなってしまいます。

松濤 私なども絵と書きます折、下塗りなどは計画通り事務的に書きますが、いざ最後の仕上げの段階になりますと、自然と口に念仏を唱えております。不思議な力ですね。一種の精神的な支えとでもいうのでしょうか。

現代に生きる念仏

寺内 私は今、名古屋のCBCのラジオ局で一時間半のディスクジョッキーをやっておりますが、その中で一万円が当る電話クイズが

あります。私はその際、十遍のお念仏を唱えてから抽選しますが、最近、葬式の時のみお念仏を唱えるのではなく、この様な時にでも唱えるのですね、という投書を数多くいただきます。先週のことですが、そのクイズに当たったある理容院の方から放送終了後、局に電話が入りました。私の担当は火曜日なのですが、たまたま理容院の定休日で、しかもその人にとっては十四回目の結婚記念日だったのです。いろいろ偶然がかさなつての当選だったのですが、その夫婦にとっては念仏のかもしれないと、とれたらしいのです。

中島 私の父親は朝昼晩を通して一日五万遍の日課念仏をしておりますが、父ながら頭の下がる思いがいたします。

寺内 でも私の知っているある老僧はやりすぎて気違いになってしまいました。

中島 現在の世状からしたら、なると思ひますね。父の場合は夕方七時に終ると風呂に入り、実に酒を口にしますから、気分転換がうまくいっているのではないでしようか。

寺内 俗にもどるとのことですね。

一念多念の理解

安居 この念仏の数という問題ですが、法然上人はより多く申せとしましたが、私の師匠の林玄明僧正は、私は勉強をしているから念仏を申さなくとも、勉強もまた念仏だと、話してくれたことがあります。現代人には仲々時間の制約があり、ただ念仏を申せといつてもできるものではありませんので、スポーツもこれ念仏、勉強もこれ念仏というような、何事も念仏であると、アビールできるものがあったても良いと思うのですが。その際の心構が大変な問題となるのは当然ですが。

松濤 私の場合は精神統一と考えますね。

中島 念仏で精神統一ができれば、これほど幸いなことはありませんが、現実には無理ではないのですか。

松濤 それは行動する中に自分の手元に引き入れながらすれば、大変な精神統一となりますね。

中島 そういう意味からすれば、宗学は怠慢だと思ひます。どのように念仏を申せばよいのかといえ、解らないという態度が見える

のですが。

真野 浄土学とは全宗門の学問と考えます。

狭い意味での浄土学をピラミッドの頂点と考
えてはいかがでしょうか。

松濤 念仏には広い意味合いがあるのでしょ
うね。

安居 広い意味ということは現代的理解とい
うことだと思いますが、それを我々自身も切
り開いていく必要があるのです。

中島 いろいろな考え方があってでしょうが、
実際に念仏を申して、念仏が難中の難である
と承知し、その上で教義を考えていただきた
いということですよ。

真野 私は次のように考えます。ある修行時
代にはできるだけ念仏を申す、そうすれば
不退転の境地に達すると思います。一端そこ
まで行けば、あとの人生は念仏の人生となる
と思います。ですから一日申さない日があつ
たとしても全体には念仏の人生であると考え
られます。もちろんずり落ちるような人はより
多く申すにこしたことはありません。

中島 しかし法然上人は一念をや多念をや、
とより多くと教えていますが。

寺内 私はこの一念多念を逆に一念でも良い
と解釈しています。

安居 この一念の焦点をどこにするか、いか
に有効にするかが問題となりますね。

寺内 私は講演会の最後や、色紙によく一日
一生、一日極楽ということばを用います。一
日が終ると同時に死に、そしてまた翌日生れ
出てくる、こういう考えのもとに、人々に死
んで後、地獄へ行くより極楽に生れた方が良
いに決っている。浄土宗ではこれを一遍の南
無阿弥陀仏を唱えることによってできると教
えています。だからまさに隙がとじる寸前に
一言唱えなさい、と話しております。

安居 私は一念一念は一瞬一瞬であるから、
その瞬間をいかに有意義に過すことが大切
か、その一瞬が最高のものであると考え、そ
れをささえているのが念仏であると考えてお
ります。

松川 私は南無阿弥陀仏の南無とは身も心も
捧げることだと思います。ですから若人が何
に捧げるか、ある特定の人に夢中になってい
る時はその人に捧げる、つまり南無何子でよ
いと考えます。その人が自分を背いた時に永

遠の南無何を求めるという課題にぶつかると
思います。その時に南無無量寿・南無無量光
が出てくるのではないのでしょうか。こうした
場合、常に死を予想すべきなのです。そうす
れば自分の能力以上のものができるし、この
積重ねが人間を大成させるのではないでしょ
うか。

利他の念仏のありがたさ

寺内 今年の二月二十八日に私は小説仲間の
癌で入院している友人を見舞ったのですが、
彼はすでに死を予想しており、私にどうすれ
ば救われるか説法してくれというんです。私
はもう君は助からない、しかし君が救われた
るめには君が今までに知った世界、人々がす
べて救われるように祈れば君自身も救われる
んだが、この意味が分るかね、という、そ
の友人は微笑みをうかべ、分るというんで
す。友人の様子を見ていた時、本当の大乗の
意味が分ったような気がいたしました。彼は
翌日十時に三十八歳の短命で亡くなりましたが、
他人のために念仏し、満足の中に死んでいっ
た彼の姿が今でも目にうかびます。

(続)

十二 因縁

—その1—



光を求めて（無明）

渋谷 賢 応

（長野県茅野・心光寺住職）

新しい光を求めて、新しい年を迎えました。この年にこそ光を求めなければならぬ。去る年のさまざまな出来ごとを思うとき、まったくの暗中模索、沖縄返還の問題、大学自治の問題、米価問題など、方針さえさだかでないようなことがあまりに多すぎました。無涯底と言うことばがありますが、これは仏智ならず煩惱無涯底とでも申しましょうか、底の知れない泥沼を思わせる問題があまりに多いようです。この外界の諸事象に対応して、やはり私たちの心の中にも無涯底の

不安がつきまといまいます。このままではおれない。このままでは済まされない。外界においていまに何かがくると思うと同時に、この私たちの心の中にあっても絶えず心底をゆさぶる不安を感じずにはおられません。怠惰、マンネリズム、際限のない泥沼。

光がないのです。如来の光明を口にしながらもそれを感じ得ることを得ず、念仏をおとなえしつつも慈光に触れることができない私たちの姿、それは信仰の教理と自分の理解のアンバランスな不徹底、お釈迦さまや法然上人のご苦勞についての理解の甘さ、信仰と生活の遊離。

外見のつくろいではないのです。もっとつきつめた、自分自身なりに納得のいく姿でありたいのです。今年はそういうことが、いくらかでも明らかになる年でありたいのです。

○

お釈迦さまはおさとりを開かれるに当って、その自内証として苦集滅道の四つの聖諦と、無明以下生老死の十二の因縁を観察せられたと伝えられています。特に十二因縁は生老死より無明にまで逆り、又無明より生老死にまで返って繰り返えし思惟せられたと伝えられています。お釈迦さまのおさとりはこの輪廻の世間より、ご自身の省察に向けられた、つまり人間性の根元的な反省より端を発していると申されています。

す。いまお釈迦さまのこのご苦心を察するとき、私たちはあまりにも安易な姿勢でこれを受けとめているのではないかと、思わずにはおられないのです。

百論経に次のようなお話がございます。

「昔、お金持ちではあるが愚かな人がありました。他人の家に行った所が三階建てのすばらしい新築の家だったのでひそかに次のように思いました。『彼はすばらしい家を建てたが富においては俺だって彼に少しもひけをとらない。大工を呼んで建てさせよう』こう決心して早速建てはじめたのです。大工は仕事をはじめました。まづ整地し、土台石を置き土台を廻し、その上に一階より造りはじめたのです。その人はそれを見て不審に思いました。『どうしてあんなことをするのだろう』そして言いました。『大工、君は何を造ろうとしているのです』大工さんは言いました。『三階建てを造ろうとしているのですよ』『俺の欲しいと思っているのは三階なのだ、下の二階には用はない。俺の言う通り三階だけを造ってくれ』大工は言いました『そんなことは出来るわけがありません。何んで最下位を造ることなく二階ができればいいか、二階なくして何で三階ができればいいか』その人は言い張りしました。『下の二階には用はない。三階を造るのだ』人びとは伝え聞いて笑いました。」

この話は痛く私の胸を打ちます。形造られた仏教の中にあって、お釈迦さまの法説をそのままに聞き、法然上人のおさとしをご法語で見、それが我がものとなりわかったような気がしてわかっていない私が、それ以上何も苦しむことなく努力することなく、仏教の現状をなげき顔に生きていることは何んと恥知らずな姿でありましょうか。

○

そのことを思うとき、十二因縁をただ口に、無明、行、識名色、六所などと言うだけではなくて、もっと地についた、私のものとして堀り下げなくてはならぬ、その一一についてもっと深く考えて見なければならぬ。そして、少しでもお釈迦さまのその時のご心労に近づきたい。さもない限り私はただ怠弱なマンネリズムに終止してしまふ。十二因縁を、ただ原始仏教の体形の一つとしてのみ知ることであってはならない。人間の根元として体で考え、体で認知するのでなければ生きた姿として具現してこない。このように思うのです。

一体その十二因縁の第一たる無明とはどのようなことを申されたのでしょうか。お釈迦さまは人間迷界の極限たる、生老死より始めて順を追ひ、因果関係を求めてここにたどりつかれたのだと伝えられています。それは一体どのようなことを申されたのでしょうか。阿含経などでは癡と申して「過

去世無始の煩惱にして、一切成立の根本的起源なり」とも「真諦を解せざる心」ともあり、また「愛の根元」とも解されています。「無明」をことばとして見れば私たちの生れながらにもっている煩惱、いや生れる前よりすでにあった抜き難き煩惱として解するより外申しようのない頑迷なエゴイズムと思われるのです。私たちの気のつく範囲の煩惱ではない、自分で自分にわかる煩惱ではない。もっとその底にある救い難い心とでも申しましょうか。その所説の如く、生れつきの、生得のものなればこれをいかんともし難いものと解されてきます。一切成立の根本的起源と言うことであれば無明によらなければ一切成立せずとも考えられます。人間生存の本能とも言うべきものなのです。ここにおいて、無明を断ち切ることの難しさを思うとともに、迷界のはてしなき相をうなずかずにはおられないのです。

「法爾の道理と言うことあり。ほのほは空にのぼり水はくだりさまにながる。菓子の中にすきものあり、あまきものあり。これみな法爾の道理なり。阿弥陀仏の本願は名号をもて罪惡の衆生をみちびかんとちかい給えば、ただ一向に念仏だに申せば、仏の来迎は法爾の道理にてうたがいないし」

申すまでもなく法然上人のおことばです。阿弥陀仏のご本

願は、お念仏を申すことによって私ども煩惱多をものおもおすくい下さる。ご来迎にあずかることができると言うことは、法爾自然の道理であってうたがう余地なしと極言せられています。

法爾の道理本願と、根本起源の無明と、この二つを思うとき、私は私の思慮を越えたかなたにおいて、表裏一体となることを体認せずにはおられないのです。言いかえて申すならば本願とは、この根本無明を断じ去った利剣であって、お念仏をおとなえすることはこの私たちの思慮を越えた境界において、なしつくされた無明即断の本願を、心底に信じつくして生きることなのです。

門々不同にして八万四千なるは

無明と果と業因を滅せんがためなり

利剣は即ちこれ弥陀の名号

一声称念罪皆除

この降魔の偈は私を策励してくれます。怠惰、マンネリズム、際限のない泥沼の中にあって、ほのかな光と、奮い立つ勇氣とを与えてくれます。混迷の脳味噌に統一を与えてくれます。

新春の光の中にあって、この文を胸に秘めて鈍足を一歩進めたいと念願いたしておる次第です。

ハガキでひとこと

春への誓い

寺尾 弁 瑞

(神奈川・長善寺住職)

新春への誓いと云う程でもないが、呑気な私でも私なりに少しは計画めいたものを考えて観る。

でも事、志とは随分変わってしまうことが多い。昨春も印度仏蹟巡拝を考えていたのが、欧州視察に変わってしまった。

意外に永くやってしまった公務員を退いて以来、見残した国内の観光旅行に専心しているが、世間は仲々遊ばしてくれない。だが、その後結構忙しい日を送っている。

退職後は寺内に籠り、読書したいと思って積んだ書籍も、今は視力と根気の欠乏で、睡眠薬の変わりになってしまった。この頃は印刷

技術の進歩で美しい原色本が沢山できるようになった。今後は見て楽しむ本を買うことにした。変った所を見、本により過去・現在を知り、考えて観る。これで結構依頼されるお話の材料ができる。念仏弘通の教材もできてくる。

本年もこの程度で無事に祖師報恩と念仏の実践と教化の一ヶ年を過したい。

白 幡 忠 美

(秋田・天然寺住職)

正月が来るたびに本年は何かしようと思う。寺内興隆のためにと、それが一つのはげみにもなる。

新本堂を五ヶ年計画で、昨年落成した。地方にはない近代建築のため、今まで来なかった若人がもの珍らしさも手伝って、法要や節句のたびに参詣するようになった。

自転車置場をつくる計画でいたのが、豊作のために農村には自家用車が増える。また商売用の車が境内をうめつくすこと、度々あるので駐車場の建設をした。

これと共に若い人達に対して各種の機関紙を通じて宗教的な面を浸透させてはいるが、他人の考えを聞く場がないため、共通の場を持たせたいという願いに答えて、青年部を結成し、役員共々組織がためをしている。

寺の役員の中にも二代目を必ず入れ、親子共一緒に法要の際に働いてもらっている。これも寺内興隆、浄土宗の繁栄ならばと思う。

福 岡 貢 乃

(神奈川・横浜在住)

私ごとき俗人が、浄土誌に新春への誓いなど、縮のかぎりですが、一昨年父がなくなつてより以来、朝晩行なっているおつとめを、更に続けていきたいと思っています。誠に当り前のことのようなのですが、忙しい時など、つい忘れるのが常でございます。

朝に晩に仏壇にともすローソクの明り、あたりにただようお線香のかおりの中に、静かな心と時を過す仕合せを続けていくことを誓いたいと思っております。



とり（酉）の年

安井 翠

※ ※ ※

昭和四十四年はとり（酉）の年です。昭和も永く続いたもので、あと一年で明治と同じ年になります。天皇の在位年間の永さによるものですが、昭和の年代に四四目の酉年を迎えることは、先ずはめでたい事とせねばなりません。昭和元年の人もう四四才で、決して若くない。俺は昭和っ子なとと、若さを威張ってもいられなくなりました。

酉年は、とり、即ち鶏を十二子では指しています。十二子を動物の名に当てはめる風習は、已に中国の漢の時代に見られることで、極めて古いことです。しかし、子丑

寅などと十二子を漢字で書き、これをねずみ、うし、虎などに当てはめているのですが、漢字そのものと動物の名とはすべて一致しません。どうしてこうした動物名が十二子に当てはめられたかは、未だに明らかではありません。

酉も今では鶏にあてていますが、酉字ににわたりの意味はありません。殷の時代の甲骨文字では酒どつくりの形象文字となっていて、この字は元来、酒どつくりのことです。そんな事から、さんずいをつけると酒という字になります。酒は、いろいろなもののエキスで、醱酵させたものをしほってできます。醱酵という字も、従って酉

（酒）に関係する字です。醬油の醬も、酉と関係する字であり、やはりしほって取ったエキスです。こんなわけで、酉は鶏とは何の関係もないのです。

しかし、これは文字学上のことであって、だからといって、酉の年を、鶏と何の関係もないと言い張る必要は、どこにもありません。人間生活の永い歴史の中で、習俗化されたこのとり年を、われわれは喜んで迎えたらいいでしょう。そして、暁天に高らかに夜明けを上げるように、昭和四十四年も、又平和な年であるように願いたい。日本の神話によると、天照大神が天の岩戸から出られるとき、暁をつけたのは鶏だとい

うことです。日本の夜明けも、又鶏から始まることになります。

この頃、いろんな占いが流行していて、とり年の人について、ある占い本では次のようなことが書かれています。

鶏の能力は、そのまま、とり年生れの人にあられています。先見の明があり、人より一歩進んだ考えを持っています。将来に対する確実な見通しを持っていますから、行動は計画的ですし、むだがありません。人の思いつかぬ奇略にも長じていて、人をあつといわせるようなことを、やりとげます。

とり年の人は、頭の回転が速く、せっかちです。ちょうど鶏が、とがったくちばしで庭のあちこちをつついてまわる、あの忙しそうな姿に似ています。

とり年の特徴は、おしゃれということとす。とくに男性は身だしなみがきちんとしていないと、他人にすきを見せるような気がして安心できないのです。また女

性は、色彩感覚の点ですばらしいものをもっている人が多くみられます。

まだまだいろいろと書いてあるが、その年に当る人は思い当るところが多いことでしょう。鶏は浮気ものだともいいます。これも、又心すべき事でしょう。

鶏に関する話はいろいろありますが、中国では、「鶏頭」となっても、牛後となつてはならぬ」というのがあります。たとえ小さくても、人の頭に立つようにならねばならぬ。からだばかり大きくても、人の後になるようで駄目だという教えです。大人物になるためには、もっと大きな野望も必要でしょうが、小なりとも、長となるだけの意気は常に持っていたいものです。

しかし、これとは別に、「鶏群の一鶴」というのがあります。鶏群の中に、一羽の鶴が特に秀でて居るように、仲間の者より、一きわすぐれていることを言っています。こうなると、鶏も、烏合の衆ということになり、鶴の引き立て役になり下るわけですから、余りよい役ではありません。

この頃では鶏の曉の鳴き声を聞くことは、殆んど無くなりました。田園風景の中での鶏は、欠くことのできないものの一つでした。そして、天を仰いでおんどりが、声を張りあげるさまは、まことに清しく、心強いものでした。食用や、玉子を生ます為の養鶏は、蚕棚の中での飼育になり、鶏と自然との調和ある美しさは、この頃では見られません。時代の流れとはいえ、残念なことです。

とも角、こんなわけで、昭和四十四年の酉年を迎えたわけですが、何はともあれ、今年もよい年であることを願わずにはいられません。昭和四十五年は、七十年安保の年ということで、この頃ではその前哨戦というか、世間は何となく騒然としています。そして、どここの大学でも、革命と暴力の嵐が吹きすさんでいます。生れ出るための悩みであればよいのですが、敗戦二十五年目のうみが、こんな形ででてきた様にも思われるこの頃です。酉の年を迎え何とか明るくて平和に満ちた年にしたいものです。

教育と宗教 <その一>

——すくすくと育つ子供達をいかにより良き方向に導びいていくか。今日の揺れ動く大学問題等を考える時、もう一度検討すべき時点に来てはいないでしょうか——



人間が社会生活を営む上において最も必要なものは和ということです。この和を造りだすものは何か。それは人間各自の持ち合せる理性より生じる行動でしょう。それではその行動の裏付けとなるものは何んでしょうか。孟子は「道はちかくにあり」と、いつておりますが、この道、つまり困っている人に同情し助けるのも、また自らの才能をのばすために勉強するのもすべて道にかなった行為といわねばなりません。

この道をより良き方向に導びくのが教育です。この教育にも様々な分野がありますが、人としての道を教えるのが倫理であり、道徳です。この倫理・道徳の理念となっているの

が宗教ではないでしょうか。

しかし、現代においては何かこの倫理・道徳ということばが敬遠されがちで、特に若い人々にとっては、それは逆に自分を抑圧し自由を束縛するものであり、これらを学んでも何ら自分の人生に役立つところがないというような先入観さえ持っているようです。

そこで今回は、先に大正大学で催されました浄土教学大会の際、シンポジウムで取り上げられた、「幼児の宗教教育について」を取り上げ、御発表いただいた三氏の発表の要旨を見、この問題を掘り下げてみたいと思います。

——編集部——

現行の教育制度から見た幼児教育の位置

渡 辺 真 澄

(東京松苔幼稚園々長)

私は二十年あまり幼稚園を経営を通し、その間、宗教と教育の関係について考えてまいりました。

と思います。

が、今は不十分ではありますが、それらを通して私なりの考えをまとめてみたい

現在の我国の教育制度はご承知の通り公教育とされており、公教育といいますが、まず公立学校が思いうかびますが、現在の憲

法および教育基本法のたて前からいうと、学校は公（おおやけ）の性質をもつものと規定されています。この中には公立のみならず私立の学校も包含されます。したがって私立学校である私立幼稚園も公教育であるといえます。それについて一般の認識がかならずしも充分でないところに、いろいろな問題が起る因になっていると思います。

その中で宗教々育はどのように扱われるか、公立の教育の立場としては特定の宗派教育はできませんが、私立の場合には何ら差しつかえありません。ただ私立学校も公教育であ教するという立場から、遠慮がちに取り扱われやすいのですが、教育基本法の立場からは逆に積極的に行なつてよいのではないかとさえ思います。

ただ現実には、公立学校では宗教というものがほとんど無視されています。教育基本法では宗教は尊重され、決して禁止されてはいないのですが、戦後の義務教育では宗教を意識的に無視して、いわゆる非宗教的な教育が行なわれている訳です。このことが現在の私達の立場からみると、いろいろな社会問題の

原因となつていのではないかとさえ考えさせられます。

このように考えてきますと、日本人の宗教情操教育をやしなえるのは私立学校しかないことになります。しかし、小中学校の九十%以上が公立学校であることを考える時、義務教育における宗教情操教育は大変困難であることになります。したがって義務教育ではない、しかも私立の学校、幼稚園・高校・大学等の機関での宗教々育が大変重要となつてくることになります。

現在我国の幼稚園は約八千あります。そのうち約五千が私立幼稚園で、その半分が宗教法人立の幼稚園、またその半分が仏教系の幼稚園です。また全国にはほぼ同数の仏教系の保育園がありますので、全国には仏教系の幼稚園または保育園が約五千あることになります。

それではその中で行なわれている宗教・仏教々育はいったいどのような形になされているか。そのうち浄土宗寺院が経営する機関で、浄土宗の教学がどのような形で幼児教育の中に生かされているのか、こういう問題になる

と思います。

しかし現実には幼児の場合、浄土宗の教学をそのまま結びつけて教育するには種々な問題をもっております。それにもかかわらず現在の宗門の幼児教育というものが、はっきりとした形ではとらえられていないと考えられます。一つには浄土宗の教義の中における幼児像というものが確らずしも明白でないということです。成人の場合にはいろいろと教学の面で見ることができますが、幼児の場合にはどうであるのか、更に一方には寺院の経営する幼稚園・保育園が公の性質を持ち合せている以上、特定の教義なり布教だけでは、公教育としては確らずしも適當でないという見方があります。

また通園する幼児の家庭がすべて檀家であるとはかぎりません。特に都会地にあつては宗教的な関心を持たない家庭が多いのですから、そのような家庭の幼児にどのような宗教教育をほどこしたらよいかという問題が生じてまいります。

そこで、そのような問題をこえて、我々があえて仏教保育、更には浄土宗保育という看

板を掲げていく以上、そこには何らかの時限が必要となつてまいります。

ともかくまったく白紙の状態で園の門をくぐってくる幼児に、まず宗教的雰囲気はひたせらるゝということから出発し、いろいろな機会をとらえては指導している訳ですが、幼児の場合には宗教的なことを話しても、仲々理解しませんので、体験上から納得させることより始めることになります。一年乃至三年間の園で受ける生活の中から、ある程度までは体験的には身につけてまいります。

しかし、それと家庭との関係、卒園して後の小学校での生活との関係がどのようなになっているか、私達の力のいたらなさを感じると同時に、現在の学校教育のあり方、家庭教育のあり方について、種々な疑問を持つております。確かに現在一部にあります反宗教的な風潮というもの、今後は益々増大していくのではないのでしょうか。一方には創価学会に代表される新興宗教が幼稚園経営に進出して来ていますが、これにどのように対処していくか。

以上のように様々な問題がありますが、現

在ででき得る範囲内で、充分な力をそそいでいきたいと考えております。ただ現実には、寺院設立のものでありながら、仏教的色彩をあえて出さずに、一般的な教育面にウエイトをおくところが多少あるのですが、この点は現

幼児の宗教教育と浄土教学との関係

福井 豊 信

(東京・ルンビニ幼稚園々長)

非常にむずかしい問題ですが、まず前提として第一に教育は布教の手段であつてはならないということ。これは近代教育以後、教育の方からいう命題です。近代教育は子供の生活を尊重し、教育の自立性が基礎となつていのですから、布教の手段と考えてはならないのです。

第二に仏教保育の場合には教化であるということ。布教あるいは教育を広い意味での人間形成のあらゆる働きかけ、そういうものを含めた上での教化としてとらえたらどうかということ。一宗一派の布教ではないが、教育学でいう意味での教化活動であると

行の公教育の中で許されている私立学校としての自覚を充分にして、宗教的な、特に仏教的保育にウエイトをおく方向を打ち出すべきではないかと考えております。

とらえる。ここまでとらえなければ我々宗教者があえて教育にたずさわっている意味がないのではないのでしょうか。

第三に一般的な仏教保育という立場で考えるのか、浄土宗保育という立場で考えるのかということ。これには浄土宗としての立場があるとは思いますが、現状では仏教保育という立場で全体を統一する形を考えた方がよいと考えます。仏教保育とは仏教を根本理念として主体的に実践することであると、一応とらえてみたいと思います。

その場合、仏教とは敬尊の生き方、考え方に促している。もう一度お釈迦さまの考え

方、あるいは生涯歩まれた足跡、これらに促している立場を仏教としてとらえてみたいのです。

教育学的立場からの仏教保育とは、家庭教育の性格を内包しながら系統的集団教育を中心機能とする教育であると定義づけられます。教育を機能的にみると、家庭・学校・社会の三つに大別されます。

今幼児に限ってこれをみますと、幼年期、つまり小学校三年頃までを考えますと、その中心は家庭教育で、学校教育はその側面に位置されます。したがって幼稚園・保育園での教育は家庭教育から学校教育への橋渡しの性格があると思います。

幼児の年令層いかんでは家庭の延長であり最近いわれております零歳保育が実施されれば、それは家庭教育そのものになります。三歳以後になって、ようやく集団教育の中に入る訳です。ですから幼稚園教育は双方の部分を持ち合えた、一つの橋であるという仮設を立てておきます。

一方、仏教保育とは仏教を根本理念として主体的に実践することですが、それを導びい

てくるのが保育者、教育者の心情です。その心情を導びくのが各自の内面的自由である信仰です。この点で浄土宗保育を考えたいのです。

浄土宗の信仰に立った上での教育真情を高揚したいのですから、浄土信仰を一応教育者の内面の信仰という立場で確立させればよいことになります。その場合には浄土宗の教義儀式をよりどころとして、信仰を高めていくのですが、これを現代教育とのつながりにおいて考える時には、先の釈尊と同様、もう一度素直に法然上人の生き方、考え方に触れることによって、その真情を育てる方向があるのではないのでしょうか。

そこで法然教学と現在の教育とのつながりですが、子供の可能性を全面的に認めるというのが近代教育の根本であるとするならば、浄土宗教義の基本と考えられます末世観・凡夫観というものが、幼児に当てはまるかどうかという大きな命題があると思います。

これは大変難しい問題ですから一概には述べられませんが、その命題の前提として仏教全般の原理である、悉有仏性を念頭におくべ

きでしよう。これを理解せずしては浄土宗開宗もなかったのではないかとさえ考えます。そこで人間を発達段階的に考え、幼児の段階では凡夫観というよりも仏への可能性を内在する非常に尊い存在であるという立場から幼児をとらえたいと思います。

また各宗派共通のことですが、私個人の仮設として、人間の成長段階に促した仏教、つまり幼児には幼児の、乃至老人には老人の仏教が考えられないでしょうか。もしできるならば幼児教育に仏教がスムーズに取り入れられるのではないのでしょうか。

最後に、浄土宗保育の現在の立場をどのように見たらよいか。浄土宗のもつ大衆性をいかに国民大衆の求める教育に反映させ、実践させるか。このためには先に述べました法然に帰る、つまりあの開宗当初のエネルギーを現在の社会にも生きるエネルギーとする。そうしなければ宗教としての機能を失なうのではないかと考えます。特に浄土宗人として法然上人の生き方、あるいは上人のもたれた信仰の強さ等を媒体として、浄土宗保育を作りあげていきたいと考えております。

合掌する心

○

仏身を礼拝し、仏徳を讃嘆し、他を敬愛し、自らのかたちを正し、心をととのえるのに、合掌がある。

「合掌するものは善心を起すべし」

「合掌するものは、魔を怖れしめ、悪趣の苦しみを息め、十方群衆の迷いの夢を醒し、威容を正して利生の心を発せしむ」

と經典には説かれている。

まことに、いま世界中の人びとが、お互に相手を拝み、相手を敬する心になったならば、国と国との対立もなくなり、一家庭のなかにおいても、隣り近所の交りにおいても、職場のなかでも、もっと明るい楽しい雰囲気が生じてくるのである。

「目には目を、歯には歯を」という言葉をくりかえし、闘争

心のせり合いをいくたびくりかえしたところで、和協同調の精神など出るものではなく、「怨みに報いるには怨みを以てせず」と申された、法然上人のお言葉を、しみじみといただき味いたいものである。

拝む姿、つまり合掌の姿の、いとも気高くみられることは勿論であるが、それが、旅路において、霊場のなかにおいて、殊更に、いみじく感ぜられるものがある。むかし、信州の山のなかの淋しい一筋の道で、旅の女巡礼とすれちがったことがあるが、その堅く合掌した指には、水晶の珠数がまつわっていて、折からの夕陽にさん然として輝いたことが印象に残っている。

また、狭霧の深く垂れこめた山の僧堂の廻廊を加行の僧たちが、合掌しつつ入堂してゆく姿、村の農夫が、道端の石地藏に節くれ立った指をかためて、心をこめて合掌して立って



いる姿、せわしい人生のなかに、安らいと憩いをもとめる、このひとときは、尊くも、また人として恵まれた心の境地でなければならぬ。

○ 宗教的教養は、学問的な教養とちがって、これがなければならぬ、処世上に、ただちに、不便を生ずるものではないが、これを身につけていけると、心にゆとりができ、おちつきができ、住みにくい世を、住みよく暮し、苦難にみちたこの世に、光りと悦びを見出せるのである。

学問して知識が豊富になっても、心たのしまず、絶えず不安に駆られていたのでは、人生に生をうけた意義はないであろう。

まことに合掌する心は、敬う気持ちであり、同時に自分を慎しみ、心を整えることである。世間には、合掌して神仏に礼拝することを自分自身の態度のための祈りであると解している人があるが、まことの心は、おのれを慎しむことであるから、「我欲」や「我」を押したてることではない。

また、合掌の心は、むさぼり、いかり、おろかさのいわゆる三毒の煩悩にけがされた自分自身を、仏のみ心にかうよう、向上し精進させてゆくことである。

わたしたちは、限りない、天地のめぐみによって生きる尊

い生命体であることを自覚して、仏のみ心に近づいてゆく気持ちこれが、真実の合掌の心であり、かたみなのである。

○ むかし、常不輕菩薩というお方がおられた。どんな人でも軽んぜず、みな菩薩の道をおこなえば、仏になれるといわれて、町をゆく一切の人を常に合掌して居られた。中には、これを罵ったり、投石したりする者もあったが、かえって、その人たちを合掌して通られた。それが常に人を軽んぜぬ菩薩と異名されたのである。

今日の基本的人権、人格尊重の精神を身もって実践された方である。

平安のころ、相応和尚という方がおられた。和尚は、北嶺行門の祖と仰がれて、北叡山の峰々谷々を廻られ、山中一草一木一草に合掌された。山が、そのまま仏の姿であり、全山が浄土なのであった。

人を、草を、木を、石を、山を、自然を、一切万物に合掌する心こそ、限りない天地、大宇宙の生命のみ親であるみ仏に生かされる。わたしたちの感謝であり、また量りしれない、めぐみなのである。

人を敬い、人を軽んぜず、どの人にも、そのうちにひそむ仏性に合掌することは、尊くもうるわしいことである。



葬式有用論

藤井正雄

(大正大学講師)

「私の葬式は行なわない——」

投書したのは、この会の主唱者、京都大学名誉教授・医博の稲田務氏(65)である。この「声」欄の投書に東舜英、大田典礼医博が共鳴し、なかでも太田氏は昭和四十二年一月号の「みやび」誌に「無宗教宣言」をのせて、結局、三氏によって三月から大衆運動にもりあげようと準備がすすめられた。三月二十四日の毎日テレビ「凡児のお脈拝見」では、テレビタレントの西条凡児が「——だ

学者や医師、文化人ら三十二人を発起人とする「葬式を改革する会」が、去る十一月十四日に東京本郷の学士会館に設立総会を開き、八名が今後の運営問題を論じたといわれる。この会は『葬式無用論』という、B判・一五八頁の本を発行し、一部にみられる葬儀屋、僧侶を軸とする商業主義に毒された葬式を改革しようというのがその設立趣旨だそうである。

この会の発端は、昭和三十九年五月九日の朝日新聞朝刊「声」欄に次のような投書がのったことにはじまる。

「——私は盛大な葬式に疑を覚える。そこで私の死去の場合、ただ死亡通知を出すだけに決めた。それを受け取られた人は心の中で、私を悼んで下されば結構である。世間並

いたい死んでしまつたら、何したかて無駄や。いらんこっちゃからね——」と怪気焰をあげて、葬式無用論を電波にのせた。このようにして、六月には「葬式無用の会」が開かれたが、告別式、さらにはお通夜まで返上というのは行過ぎではないかの意見がでて、結局「葬式を改革する会」として再発足することになったというのが、その経過である。

十一月十四日の朝日新聞の「青鉛筆」欄に設立総会開催の記事、十一日の夕刊には「今日の問題」欄でとりあげられ、十九日夕刊の「人——その意見」に提唱者の稲田務氏が紹介されると、毎日・読売・サンケイ新聞はもとより、中外日報・仏教タイムスなどの宗教新聞、週刊文春などの週刊紙が一斉にこの問題を取りあげて話題をさらっている。

今後、この会は二千部を刷った『葬式無用論』を普及して趣旨を徹底させ、また論文集や講演会などを催して、葬式を改革ないし廃止の方向にもっていく方針だという。会員は、提唱者の稲田氏、最初の共鳴者の東、大田氏のほかに、テレビタレントの西条凡児、植松正一一橋大教授、家永三郎東京教育大教授、猪木正道京大教授、『葬式無用論』を出版した医学書院の金原一郎社長など三十二名であるが、商業主義化した葬式にあきたらない人は入会歓迎ということで、会費は月額百円だそうである。入会希望者は続々とあり『葬式無用論』はベストセラーになるかも知れないと一部では予想されている。

『葬式無用論』の内容は、会の発端・経過からみて、肉体を単なる物体とすぎないとみる極端な唯物論の立場にたつ葬式無用論から、体裁や見栄をはっているとしか思えない盛大な葬儀を簡略にして遺族に無駄な費用と心労をかけさせないようにしようとする簡素化論まで、そのいわんとするところに大分幅がある。しかし、ごく少数の無宗教論者は別として、大勢は生活改善論的発想であるといつてよからうと思う。

だが問題は、その発想そのものにしても、また、マス・コミのとりあげかたをみても、厳肅な死に対する葬儀の意義よ

りも、その現象のみを知的、合理主義的に浅薄な知識で判断批判を下しているところにある。

稲田氏は「お経だって、聞いて理解のできる人はほとんどいないのではないか。盛大な葬式をすれば、故人が浮ばれるというのも強い迷信ですよ」（朝日新聞、人―その意見、十一月十九日の夕刊）と述べているが、葬儀の現象のみを問題として、葬儀のもつ意義には目をつぶっている。マス・コミにのったために大いに話題になったが、このような見解は今にはじまったことではない。明治維新の排仏棄釈の範となったといわれる水戸藩の施策に自葬祭の制定がある。自葬祭とは、水戸領内の人民の葬儀の営みに当って、死者を家人の手によって埋葬し、神として祀れという、僧侶の手から葬儀を分離せしめようと図った一種の神葬式であった。「自葬式」の本文に「自葬祭式は、往古の定にはなけれども、賤者の祭式に候処、今漸く仏家の法になづみ、先祖父母の祭を破戒不如法の僧に頼み、経文を読ませ、戒名とて訳もなきものに金銀を出して貰い、自祭の誠を失い、国を以先祖父母の事へ惑へる余りに、金銀を費し、奢侈を極むるを以て……右の様なことは仏法の悪しきにて無之、自然幣風となりしにて、かやうなる浅間敷敷風俗に陥候故……人々非心丈ヶ先祖父母へ誠敬を尽し、兄弟妻子打寄、誠敬を以て一家一門に祭り候

へば、些少の品備ても、先祖父母の神靈実に被為饗候なり、未聞不見の売僧の經文読たると、破戒僧の引導したるは、何の益あるべきや、依て自葬祭の式被下ものなり」

このような自葬祭式は、たび重なる洪水・干害による飢饉に対する冗費の節約という天保の行政政策であり、今の言葉では生活改善の方策でもあった。この自葬式にみられる文も、稲田氏の言辭も共通するところがある。ここで、僧職にあるものは今一度、葬儀の意義を考えてみる必要があるのではないかと思う。

私は葬儀は二つの面で重要であると思っている。一つは、死者の引導と追善回向という儀式の面であり、一つは、その機能の面である。前者は仏教教義にもとづくもので、一般にはその意義が十分に知られていないことに「葬祭無用論」のでてくる一因となっていると思われる。後者の機能は、死者に対する遺族の悲しみをやわらげる心理的な面と、死によって瓦解の危険をみる家族の社会に対する再適応という社会的な面とがみられる。

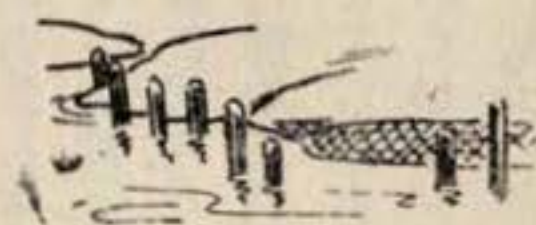
このように、葬式をすることには死者のためと、残された生者のためという二つの面があるのである。葬式無用論は、家族同様に寝食を共にした犬や猫、小鳥にまで、幼い小供が涙を流して葬ろうとする人情の豊かさを忘れた暴論であるこ

とはいうまでもないが、ただ暴論を破斥することだけでは済まされない問題が残されている。

現代人は皮相な欲望の追求に汲々としている「死を忘れた現代人」となっている傾向に目を閉ざしてはならないと思う。お寺の年賀によく「竹箸」が配られるが、竹箸には「細く・丸く・長く」という人生への願いがこめられていたと思う。ところが、現代人の人生観は「割箸」にたとえてもよいだろう。「太く・四角く（闘争的）・短く」、用が済めば捨てられる割箸のように、この人生を楽しく、愉快に、死ねばそれまでよ、といった人生観が底流に流れているような気がしてならない。案外、葬式無用論もこのような現代人意識の反映であるかも知れない。もしもこのような傾向が一層進むとすれば、僧職にある者は「現代人は無信仰だ」といっているだけでは自滅の道を述るしかないであろう。むしろ、現代人をして信仰できないようにせしめている社会条件の変化を掴み、積極的にそれぞれに人生の存在意義を考えさせる布教を考えるべきではなからうか。葬式無用論の主張される原因を謙虚に反省し、現代に即応し、商業化のベースにのらない、真の意味での信仰を確立させて、人生の意味を深く考えさせる最大の契機となる葬儀を仏教本来の姿にたちかえらせる「葬式有用論」を樹立すべきであらう。

暗黒のなかのメス

高橋良和



郁芳隋円門主は第八十一世の知恩院門跡であり、浄土門主の職にあった。

第八十一世といえは岩井智海門主のあとである。郁芳門主は昭和十二年岩井門主が退任したあと黒谷金戒光明寺本山から転住したので、黒谷本山在山中には全山炎上という事件に遭い、その後同本山の復興のために苦心を重ね建築をやりあげての知恩院転出だったのであるが、黒谷復興についての郁芳法主の血のにじむような努力は宗門史上忘れがたいものがある。

あの黒谷の復興を境として郁芳法主の眼疾は進行して、失明寸前になり、それに復興という大事業をかかえて法主の苦悩も相当なものであったらしい。

ここで郁芳法主の生いたちを記しておきたいのである。郁芳法主は天津生れで茶碗屋の息子であった。なんで

もおばあさんが熱心な念仏信者であって、いつもこの子を横において仏壇の扉をあけて念仏することはもちろん、お寺参りにも孫の手をひいてつれていった感化が僧侶になる、という結果に結びついたものだろう。

大体において名僧知識の方々の少年の時代は、こうした感化が大きな影響力となっていることは見逃せない事実であり、いかに育てる人の日々の行動が子供の心をつくるかということがわかるのである。

この天津で生まれ、滋賀で育ったということが郁芳法主にとっては何とでもうれしかったらしく、その号も甕水と称しているのである。

そこでこの茶碗屋の子供はやがて、滋賀県野州の安楽寺住職中村随源氏に弟子入りするのであるが、この寺で一人前になって、それから名利安土の浄巖院に、そして

黒谷本山にと晋山する。

安土浄巖院は代々出世する人を住職に迎えるので、郁芳法主のあとに大島徹水増上寺法主も入山している。

郁芳法主が黒谷本山に一宗公選で晋山したのは大正十五年四月であった。然しこの本山に入る前にはちゃんと出世街道を順序よくすすんで、知恩院の執事長をつとめているのである。

知恩院の執事長をつとめておかないと、大本山に晋山するのはむづかしかった時代であるから当然のことであるが、この郁芳法主は実に好運な人であって、この執事長時代が開宗七百五十年という願ってもない大法要の時であったのである。門主は山下現有門主、その下にあつて大正十二年未曾有の開宗七百五十年法要をつとめあげたこの功績が、黒谷本山への入山を早くさせたのである。おそらく郁芳法主にとってはこの開宗七百五十年の大法要をつとめた思い出は、一生のうちで最大のものがあつたろうと思う。

ところで、天は二物を与えなかった。

この郁芳法主には眼疾があつたのである。黒山本山に入山前から、眼はだんだん視力がおとろえてきている。

たまたまこれを一そう悪くしたのか、昭和九年四月十

七日の同本山炎上のことである。あのときの火事の原因は今日まで不明であるが、それをショックに、郁芳法主の眼は遂に失明寸前にいたつたのである。

「わらじを履いて全国を行脚してもこの本山の復興はいたします。」

と語つた郁芳法主のみえない眼には涙がにじんでいたが、その炎上の夜のことである。

境内はまだ人で一ぱい、現場検証が消防署や、警察によつてすすめられているときであつた。

郁芳法主は焼け出され、山内の寺に移つたのであるが、その夜郁芳法主のところを訪れたのは、信徒総代の石井重助氏である。

「御めんどください、石井でございですが、御法主さまにちよつとだけおめにかかりたいのです。」

石井重助氏の声で、ショックと疲労で床にいた郁芳法主も、総代とあつてはそのままかえすわけにもいかない。内待に案内されて、うす暗い一間に入ってきた重助氏は

「御法主がわらじ履きで復興にあたられることを聞きまして、立っても居てもおられません、これをどうぞお使いください。」

と紙づつみをおいたのである。眼のみえない法主は門

徒からそれをうけとったが、石井氏はそのままかえってしまったあと、つつみをあけてみたら、なんと復興資金として一〇万円の寄付である。

郁芳法主はそれをいただいて落涙にむせんだったのであった。

これが黒谷本山復興の寄付第一号であり、昭和九年の一万円の価値を考えてみると、いまなら一千万にもなるだろう。

こうしていよいよ復興に乗り出すのであるが、郁芳法主の眼は遂に完全にみえなくなってしまった。そこでやむなく手術することになって、京都での眼の医者として第一人者である朝山眼科で、このそこひの手術をうけるのである。病は気からというか、黒谷炎上後の法主の眼は極度に悪くなったといわれているが、それよりももっともっと法主の人柄が全く変ったほど、従来以上に念仏をよろこぶ日々の生活であった。

「手術はしますが、眼はみえるかどうかわかりませんよ。」

「結構でございます。ただひたすらに仏にすがる生活でございますので、万事仏さままかせ、朝山先生が仏さまにおがまれてなりません。」

「いや、いわれますと、わたしもあなたが仏さまにみてなりません。なんとしても仏さまの眼がみえますようにという心もちで一ぱいです。」

郁芳法主はそのことばに手を合わして、朝山博士の執刀を待ったのである。

やがて朝山博士は、メスをもって悪性の眼疾治療にあたったそのときであった。

郁芳法主はやがて麻酔がさめたときこういつている。

「朝山博士の手術のメスがわたしの眼のなかに入ったときわたしは、そのメスの先がみえた、みえなかった眼でメスの先をみた、然しそれはメスではなく、如来の光眼にみえた、おぼれるものがただ一筋にすがる仏の光が自分の眼のなかに入ったのである。思わず、ナムアミダ仏となえた。」

と、郁芳法主はやがて眼疾も多少よくなって障子のサシがかすかにみえるようになったが、いつも、

「わたしは実際この眼で仏をみた。」

とあの執刀のメスをいつも仏として拝がんでいた。

それからの郁芳法主の姿は、まるで仏のようなにこやかな相好になっていったのはもちろんである。

年 新 賀 謹

学校法人 上宮学園

学園長 小林 大 巖

華頂学園長

水野 隆 樹

熊本市九品寺三一一一

鎮西学園長

上田 貞 雄

京都家政短期大学

学長 三枝樹正道

京都府宇治市檜島町千足五〇

電話宇治(〇七七四)二一〇一代表

郵便番号六一一

東山学園長

藤原 弘 道

稲岡 覚 順

川口市北町二ノ五〇

西福寺

京都黒谷 西住院住職

戸川 霊 俊

京都市左京区黒谷町三〇

浄土宗議会議員 副議長 教授

浄土宗議会議員

井原 文 雄

山口県柳井市柳井津 瑞相寺

浄土宗議会議員 総本山知恩院顧問

栗本 俊 道

東京都文京区大塚五一一一〇 西信寺住職 大泉靈園主管

浄土宗議会議員

白井 玄 祥

東京世田谷玉川瀬田町 法徳寺

弘前市新寺町 貞昌寺 宗會議員

赤平 昌 導

浄土宗議会議員

柴田 敏 夫

横浜市港北区菊名町

蓮勝寺住職

浄土宗議会議員

飯田 信 弘

四日市市中部二 光運寺

三重県多気郡大台町下三瀬

応雲寺

北出 立 法

白幡 憲 佑

横浜市南区久保山 光明寺

年 新 賀 謹

静岡県富士宮市東町三一二八

大頂寺 石井真峯

電話(〇五四三) 六一三四六五番

神奈川県葉山町堀ノ内五六八

相福寺

明照幼稚園

杉田義俊

毎月英文欄もある寺報を発行

松濤弘道

栃木市万町二二一四

電話(〇二八二)二一〇八〇二番

兵庫県明石市鍛冶屋町五六

光明寺

山口諦存

だん王法林寺

信ヶ原良文

京都・三条大橋東詰

鎮西流根元地

聖光寺住職

小林忍戒

函館称名寺

住職 武藤善友

執事 須藤隆仙

静岡市日吉町二一二

華陽院

堀田良謙

(提案)開宗八〇〇年記念行事一

ヶ寺一五重

五重相伝勸誠師

小布施弘学

長野市松代町長明寺

天光院

真野竜海

京都市東山区古門前通東山線西入

株式会社安藤法衣仏具店

代表取締役 安藤宇助

京都 075

(法衣五六一一〇六九〇番
一仏具五六一一二四〇二番)

梅窓院

中島真孝

中島真哉

東京都港区南青山二一六―三八

法然上人鑽仰会

佐藤密雄

佐藤良智

中村康隆

村瀬秀雄

竹中信常

宮林昭彦

安居香山

佐藤行信

佐藤成順

長谷川宣丈

編集後記



◇新年に当り、会員皆様様の御多幸・御繁栄を祈念いたします。本年も様々な事件が生じ、いろいろな人生ドラマが展開されることでしょうが、より良き歴史の一ページを飾る一年であることを願いたいものです。

◇岸信宏御門主親下は大変お歌をお詠みになるが、お好きです。そこで本号では本年の勅題星に因んでお詠みいただいたお歌を解説して

いただきました。

◇今月号より高橋良和氏に筆をとっていただくことになりました。高橋氏には一昨年、「みんなの法然さま」をお書きいただき、大変好評を博しましたが、今回からは「ひとくち伝記」と題し、氏の今までお会いになった人々や経験を通じた内容で健筆をふるっていただきます。

◇今年より、より会員の皆様に親しんでいただく「浄土」とするため、ハガキ通信の欄を設けましたが、当方から出したハガキの返信が思うにまかせず、返ってまいりませんでした。追々皆様に往復ハガキでお願いいたしますので、気軽に返信下さるようお願いいたします。

◇私事で恐縮ですが、この筆を取っている折、家族で年令の話になりました。六十になる母はいよいよ老人の仲間になる溜息を、三

十になる兄は益々重くなる自分の立場に責任感を、と話しがはずみましたが、口はをさんだ二十二歳になる弟は、私はまだ十代のつもりでいる、年令は人間が作った仮のものであるから、それにかまわず、自分の成長に合わせて自分の年令を決めれば良い、という珍説をうち出しました。誠に勝手な言い方なのですが、弟は年令にとらわれず、自分のできる範囲内での責任ある態度をとるべきだと、いたかったようです。

◇今年もここに正月号を発刊しましたが、何かと至らぬ点、多々あるとは思いますが、皆様のご理解のもとにより良き雑誌に育てていきたいと思ひます。

◇新年早々誠に恐縮ですが、昨年末はいつになく資金難で四苦八苦でした。皆様方の陸代をもとにやりくりしておりますのでご協力を切に願ひます。

第五版「浄土宗のおしえ」宮林昭彦著

このたび増刷いたしました。施本としてご利用くださいませ。

価 30 円 送 料 25 円

「浄土」講読規定		一部定価 金六十円	
会費一力年 金七二〇円		(送料 不要)	
浄土		正月号	
昭和十年五月二日		第三種郵便物認可	
昭和四十三年十二月二十五日 印刷		昭和四十四年一月一日 発行	
定価 六十円		編集人 宮林昭彦	
発行人 佐藤密雄		印刷人 関 二三男	
印刷所 新光社印刷株式会社		東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六	
発行所 法然上人鑽仰会		電話東京二六二局五九四四番	
東京都港区芝公園十九号地の一		浄土宗務支所内	
編集室 法然上人鑽仰会		昭和四十四年一月一日 発行	

宮林昭彦 著

「極楽に生きる」

宗祖のご生涯を通して、現代に生きる私達に
指針を与える好書

定価二六〇円 送料五〇円

御希望の方は弊会まで申込み下さい

四版 村瀬秀 著

浄土宗檀徒のおつとめ

訓読・註解を付したわかりやすい経本

定価一〇〇円 送料五〇円

御希望の方は弊会まで申込み下さい

◇ 浄土トラクト ◇

四季の寺まいり	(再版) 安居香山 著	価30・〒15
浄土宗のおしえ	(五版) 宮林昭彦 著	価30・〒15
諸仏の戒め	村瀬秀雄 著	価5・〒15
一枚起請文をめぐる	村瀬秀雄 著	価120・〒35
選択集私解	竹中信常 著	価125・〒30
ものいう石	竹中信常 著	価150・〒45

多数お申込みには割引いたします。施本にご利用下さい

発行所 法然上人鑽仰会 TEL (262) 5944
振替 東京 82187

年賀新謹

總本山 知恩院

門主 岸 信宏

執事長 鵜飼隆玄

浄土宗宗務庁

浄土宗宗務支所

大本山 増上寺

法主 椎尾弁匡

執事長 里見達雄

大本山 百万遍知恩院

法主 神居琳応

執事長 清山善信

大本山 善光寺大本願

法主 一条智光

副住職 鷹司誓玉

執事 早川利雄

大本山 光明寺

法主 大野法道

執事長 吉川哲雄

東京心光院

戸松学瑛

鎌倉大仏殿
高德院

佐藤密雄

東京都港区赤坂四丁目

浄土寺

阿川貫達

里見達雄

東京都文京区小石川三十四一六

伝通院住職

大河内隆弘

祐天寺住職

巖谷勝雄

東京都目黒区中目黒五十二四一五三

電話 (712) 〇八一九

東京都大田区田園調布

照善寺

田丸徳成